

## “紅海”と“黃海”

——カラフルなイメージに彩られた地名——

岡 田 久美子

春休みの一日、アカバに居た。  
 “アラビアのロレンス”一読以来、久しく憧れの地となっていたところである。当初の感激も収まり、のんびりと棗椰子の木蔭から碧く澄んだ海の色を眺めていると、「地名って、かなりいゝ加減なものだなあ」と思えてくる。  
 ある限られた部分を、ある限られた時期に望見した第一発見者が、その印象を全体のものとして命名してしまった例は少なくない。  
 今、目の前の“紅海”にしても、どこへ行ったら赤い藻トリコデスミウムは見られるのだろうか。  
 だが、しかし——。  
 “紅海”という名前は、炎熱のアラビア半島と暗黒大陸アフリカに挟まれて、細く長く伸びる此の海には、如何にも相応しい名前ではなかったか。スエズ地峡を境に、海の色がパッと変わった……その想像は、なかなかドラマチックで楽しい。

“十人十色”という言葉がある。「人さまざま、人それぞれ」ほどの意になろうが、これを文字通り読み取ってみると、各人のイメージを色で表現することになり、結構面白い。熱血漢のA氏は燃える赤。包容力豊かなBさんは深みのあるオレンジ。いつもクールなCさんは透明なブルー。その時々で印象の変わるD氏は玉虫色か、それとも何かツートンカラーにしてみようか……等々。

では、“国”の場合はどうだろうか。  
 生徒達に統計資料を渡す際、白地図ならぬ白いグラフも添えて、国別の%を自分で記入させている。そしてグラフを視覚的に印象付けるために、登場頻度の高い国については、各自でその国のイメージカラーを設定し、塗ることを薦める。  
 そのようにして出来上がったものを覗いて見ると、彼等のイメージカラーは、自然環境や民族性から受ける印象、国旗の色からの連想が多いようだが、特に大勢を占めるのは、U.S.A.の水色と中国の黄色である。何故中国が黄色かと尋ねると、曰く「内陸に広い黄土高原がある」「米も小麦も生産高トップだから、収穫期は黄色でいっぱい」など。

これらの答も含めて、中国＝黄色には、私も双手を挙げて賛成したい。彼の国の人々にとって、黄色は好ましい色とされているらしい、と考えられるからである。多少の根拠を並べてみよう。

その昔の中国では、方位を色と動物で表現した。国造りの最高の立地条件として、「東に清い流れ（青龍）有り、西に隣国へ道（白虎）通じ、南に豊饒の沃野（朱雀）開け、北に寒風防ぐ山（玄武[黝・鼈]）聳え……」は、成程北半球の大陸東部に位置しているのだからと納得できる。では肝腎の黄色は？ これは中華思想そのまゝ、五行五色の順序からみても、見事なまでに、どっかりとその中央に居座っているのである。

五帝中第一に列せられる“黄帝”は、音楽や文字などを制定し、漢民族の祖と仰がれている。

奇岩と名松と雲海の“黄山”は、中国有数の景勝地として、内外あまたの観光客が杖を曳く。

更に“黄”の字そのものは、光と田の含意文字であるから、農耕の民にとっては嬉しくめでたく、大いに歓迎すべき字であろう。

易経の「天玄而地黄……」を俟つまでもなく、“黄土”は即ちこれ大地である。その黄土を刻みつゝ、三千年の歴史を育んだ川が“黄河”。そして、河口の果てに広がった海が“黄海”。古く黄河を「黄龍」と呼んだように、長江もまた「紅龍」と称した。しかし此処には“紅”の執拗なまでの繰り返しは、無い。北方のアムール川「黒龍」江の“黒”についても、同様である。

だが、“黄”という字があるからといって、実際に黄色では、勿論無い。黄龍は、蘭州で見ても、包頭で見ても茶色だったし、重慶や武漢の紅龍も、ハバロフスクの黒龍も、全く同様な茶色であった。

しかし、中国にとって大切な川は、やはり“黄河”という名でなければならず、且て注いだ海は、是非とも“黄海”であらねばならない。

上海上空から名残り惜しく振り返ったとき、眼下の海はたとえ紺青に映えてはいても、中国の縁海であればこそ、“黄海”の名が相応しい。